
Fate/Zero 閻を駆ける者

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/Zero 閻を駆ける者

【NZコード】

N8680X

【作者名】

刹那

【あらすじ】

もしも、間桐雁夜が一般人として生活を送れていなかったら、ある事件に巻き込まれて新たな力を得ていたら、間桐の名を捨てたら、その力を持つて聖杯戦争に挑んでいたら、これはそんな物語。魔術師ではない雁夜が聖杯戦争を戦い抜く。

本作はFate/Zeroの二次創作です。

序章（前書き）

作者は原作のFate/Zeroを読んでいません。
アニメに感化されて描いています。

よつて原作と設定が変わる可能性がありますのでご了承ください
それでも良い方はお読みください。

キャラの口調がおかしい場合もあります。

序章

「マスター、一体のサーヴァントが港の工場地帯で確認、さらには方のマスターと思われる女性も確認しました」

『ああ、こりからも確認できた』

オレはサーヴァントと放つた使い魔のおかげでその様子が確認できただ。

「それと、近辺にもう一体のサーヴァントの存在も確認できました」

『もつ一体?』

「はい、さうこそ。そのサーヴァントのマスターと思われる少年も確認できました」

自らのサーヴァントの言葉に自らも風術行使して付近を探索。

すると強い魔力を持った存在がいることに気がつき、

そのまま近くにもう一人魔力を持つものがいることを確認する。

おそらくそこから港区の工場地帯の一体のサーヴァントの闘いを見るためだろうか。

だが見るだけなら使い魔だけで十分のはずだ。

『わかった、引き続き監視を続けてくれ』

その言葉を最後にサーヴァントとの念話を終える。

近くにあつた椅子にびりかりと倒れこむよひに座る。

そして自らの令呪を仰ぎ見るよひに掲げる。

『ついに、始まつたんだな。聖杯戦争が

そう言いながら掲げた腕を降ろす。

一體のサーヴァントが激突したといつ情報を聞いてやつと実感した。

『正直、マスターとか、サーヴァントとか。俺にでか過ぐるものだつたから実感湧かなかつたんだけど』

そこまで言つて区切り、深呼吸をして立ち上がる。

『ここまで来たら後戻りは出来ない、俺には絶対にやらなければならぬことがある』

だからこそ、もう迷う時間は無い。

『始めよう聖杯戦争を、魔術師同士の殺し合いを、あの娘の笑顔を奪つた聖杯を、破壊するためにも』

壁に掛けていた服を取り身に着ける。

この服は彼が戦闘を行うときに用いる、いわゆる戦闘服。

この服には簡単な戦術が施されており、ちょっとの衝撃では破壊どこか装着している人間にもダメージは無い。

まあ、サーヴァントの一撃を食らえば一発であるうが。

サーヴァントからの情報で敵のサーヴァントの位置はわかっている。

行き場所は決まった。

『いぐぞ、アサシン』

「御意、マスター…………雁夜」

俺の、間桐雁夜ではなく。

緋神雁夜としての闘いをしよう。

願うことは唯一つ、あの娘の笑顔を取り戻すために

序章（後書き）

読んでください。ありがとうございます。

第一話 帰ってきた精霊術師（前書き）

義経です。

第一話の投稿です。

第一話 帰ってきた精霊術師

「落後者がよくおめおめと顔を出せたものよ」

『久しぶりだな、くそ爺』

オレは間桐邸の一室で一人の老人と対峙していた。

老人から浴びせられる視線は完全に嫌悪のもの。

「その面もう一度とわしの前に晒すでないと、確かに申したはずだがな」

老人はその嫌悪を隠そつともせずにこちらに向けてくる。

それはそうだろう、何せオレは間桐を捨てた男なのだから。

『遠坂の次女を、桜ちゃんを養子に迎え入れたそうだな』

「耳の早いことよ。して、それがどうした。」

オレがその話を聞いたのはつい最近、偶然幼馴染の葵と出合つたときだ。

それを聞いたからオレは一度と戻らないと決めていたこの間桐に戻つてきた。

『今までして、間桐に魔術の因子を残したいか』

「それをなじるか、貴様が。間桐を捨て、魔術師である」と止め、名も捨てた貴様が

そう、あの口。

オレは間桐の名を捨てた。

過去の自分と決別するために、新しい自分として生きるために。

『やうだな、あんたとしてはそいつが許せないってところか』

「たわけ、碌な魔術回路も持ち合わせておらぬ貴様などに価値など無いわ」

血の息子である自分を魔術回路の有無で決める。

その臓覗に少し苛立ちを感じながらも冷静を保つ。

「して、何のようだ。緋神雁夜」

緋神雁夜、それが今のオレの名前。

元々は偽名として使っていたが、現在はそれを正式に使っている。

『取引だ臓覗』

「取引?」

『やうだ、お前の願いは聖杯による不老不死だろ?』

人と呼べるものではなくなつたこの老人。

それでもなお永遠の命を欲しているのだ。

「それで」

『今回の聖杯戦争でオレは聖杯を持ち帰る。やつなれば、桜ちゃんに用は無いだろ?』

「あの小娘から、手を丐けと」

『やつだ』

「つ~む」

臓硯は「」の言葉を聞いて考えるよつに手をあいじて持つてこぐ。

だが臓硯はこの条件を飲むはずだ。

臓硯は失うものはない、オレが勝手に戦つとこつのだ。

そして、

「よかれど、貴様との取引に応じてやつだ」

その言葉を聞いて安堵の息が漏れる。

『なり、桜ちゃんは今びこしてゐる』

そつと臓硯は「」とこやうにやうし笑いを浮かべる。

その笑みを見てオレはこれまでの経験で察する」とが出来た。

「遠坂の娘は今蟲倉にいるわ」

その言葉がオレの脳内を駆け巡った。

「どうする雁夜、すでに壊れかけの小娘をそれでも救うと」

『当たり前だ』

救つて見せる、あの娘を。

オレの命に代えても、絶対に。

それから、一年の時が過ぎた。

第一話 帰ってきた精霊術師（後書き）

読んでくださいてありがとうございます。

第一話 呼び出された影（前書き）

第一話の投稿です。

今回はいきなり急展開です。

第一話 呼び出される影

間桐邸の一室に雁夜と臓硯が揃っていた。床にはサーヴァント召喚のための魔法陣が描かれている。

雁夜の手には令呪が刻まれている。

「クツクツクツ、まさか貴様にサーヴァントを御するほどどの魔力を持ち合わせてこようとわな」

『どうでもいいが、わざわざ召喚を始めさせて貰うぞ』

臓硯の話ではすでにセイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、そしてバーサーカーの召喚はすでに行われたらしい。

そうなると残りのサーヴァントはキャスター、アサシンの二体だけ。それならばオレの生き方からしておそらくは、

「では、はじめよ」

その言葉にオレは歯を強く噛み合させ、息を吸い込み呪文を唱つ。

『告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うなりば應えよ』

召喚のための呪文を発するたびに令呪が反応し魔力が集中されていく。体中の魔力が騒ぎ出す。それと同時に心が躍る。

『誓いを此處に。私は常世総ての善と成る者、私は常世総ての悪を

敷く者』

これから始まるであろう闘いに。

命を掛けた闘いに、奇跡の瞬間を挿めるといつ事実に。

『汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

!』

魔法陣が輝き、部屋を光が包み込む。

「我が名、アサシンのサーヴァント。呪喚の儀に従い、ここに参上
した」

冷淡な声、心を殺したような低い声が耳に聞こえてきた。

これがアサシンのサーヴァント、漆黒の体に白い仮面を嵌めた長身
の男性がそこに立っていた。

『よつこじアサシン、オレが君のマスターの緋神雁夜だ』

そうじつて一步前に踏み出す。

「カツカツカツ、アサシンとは貴様らしい』

臓覗はオレがアサシンを召喚したこと納得しているようだ。

だがオレはその言葉を無視してすぐアサシンに命令を下す。

『アサシン、これからのは話は後にしよう、オレの部屋に来てくれ』

「御意」

アサシンはやがて靈体化する。

臓覗もサーヴァント召喚に成功したので一安心といつてド部屋から立ち去りつつある。

だがオレは臓覗が動き出す前にアサシンに念話で話しかける。

『（アサシン）』

「（何用でしょう、マスター）」

アサシンもこいつらの声を出していつ話ではないとこいつ意図に気が付いて念話で応える。

『（おの宝具を教えてほし）』

アサシンの真剣はこれまでの聖杯戦争すでにわかっている。

問題はそれがどのハサンであるか。

どんな宝具を持っているかで動き方が変わる。

「（はつ、我らの宝具は妄想幻像、精神を分割しそれに応じた体を
ザバーニャ

得るものです)」

その言葉を聞いてオレは内心笑みを浮かべた。ビーナスの都合が良い宝具を持つアサシンを引いたようだ。

オレは「この口のために準備してきた野望を実行に移すこととした。そのためにはまず桜ちゃんを保護する必要がある。

今日は蟲倉をサーヴァントの召喚に使つてこの部屋で寝室で寝つけるはずだ。

『(ならばアサシン、この屋敷の中にいる少女を保護してくれ)』

「(承知しました、すぐに一人送りましょう)」

アサシン程の暗殺者なら対象を見つけるまでに時間は要らないだろう。

だからこそオレはアサシンのサーヴァントを召喚したかったのだ。

『(それと、オレが合図したら間桐臘覗を殺せ)』

「(御意)」

アサシンはオレが父を殺せと言つた言葉に何の迷いも無く応えた。

さすがは超一流の暗殺者である。

アサシンとの念話を終えたオレは臘覗を見る。

この部屋に用はないため蟲倉から出るために階段を田舎して歩いていた。

やるなり今しかない。

『アサシンー』

オレは超高らかに自らのサーヴァントに命じた。

その声に反応して妄想幻像ザバーニャを使い十人のアサシンに分れる。

一体は靈体化したまま桜を救うためにすばやく移動している。

「ムツ」

臓硯がオレの声と動き出したアサシンに不審を抱き歩みを止め、ちらを振り返る、その瞬間であった。

―――ズスツ！

九体のアサシンが一斉に臓硯を切り刻む。

持ち前のダガーで刻んでいく。

だがこんな簡単に臓硯が死ぬはずが無い。

「貴様、雁夜。なぜわしを襲える。だがこの程度で」

殺せると思つた、そいつをうとしたのだね。

だが俺はそんな言葉を待つてやるほど優しい人間じゃない。

周囲の精霊を搔き集め力をこめる。

『消え失せろ、臓硯』

手のひらから炎の弾を出して臓硯にぶつける。

直撃した炎弾は破裂して臓硯を包み込む。

「オオオオオオオ」

先ほどまでは打つて変わつて苦しみだす臓硯。

『いくらあんたとはいえ、炎には耐え切れまい』

臓硯は蟲を糧に生きているも同然。

その蟲を体内から燃やしているのだ。

「オノレ雁夜。貴様、ワシガ死ネバ。桜ヲ救ウコトハ出来ンゾ」

『安心しろ、くそ爺。手立てが無いわけじゃないんだよ、だから』

オレは最後の一撃を加えるために集中する。

周囲を風の精霊が包み込み、集約していく。

『我が司りし清浄なる精霊よ、その力を解き放たん』

浄化の風が体の周囲を取り巻く。

今の状態の臓硯がこれを食らえば完全に消え去るだろ。』

『終わりだ臓硯、お前の願いはかなわない。これで終わりだ、くそ爺!』

「雁夜アアアアアアアア！」

風が部屋を包み一気に荒れ狂う風と成りて臓硯を消滅させる。

結構な威力を持つ風のため古くなり脆くなっている床の石が宙を舞う。

そのせいで破片などが壁に当たったり飾りなのかわからないが黒いものもいろんな方向に吹き飛ばされていき、中には蟲倉の入り口から飛び出るものもあつた。

そして完全に臓硯の影が見えなくなつたとき、風をおさめる。

『ふう、終わつたな。いや、始まつたのか』

「マスター、蟲倉内の間桐臓硯の反応の消滅を確認しました」

いつの間には一人に戻つていたアサシンは臓硯が消えたと断言する。さすがにサーヴァントの目は遜い潜れないだろ。』

『礼を言つぞアサシン』

「サービスメントに礼など無用です」

さすがはアサシンである、おそらくマスターの命に従つのは当然といふことだらう。

『それでもだ、君たちがいなければ臓硯は殺せなかつただらう』

それは事実だ、万全な状態で臓硯に炎を浴びせても、消滅しきる前に逃走するだらう。

アサシンが臓硯を斬つてくれたお陰で止めをさせたのだ。

だが、まだ最後にやら無ければならないことが残つている。

桜を救わなければ。

第一話 呼び出かれた影（後書き）

なんと今回で臓覗がやられました。
しかも呼び出されたのはアサシン。

第三話 少女の涙（前書き）

最初に記したとおり作者には原作知識はほとんどありません。
そのためおかしなところがあれば指摘をお願いします。
なるべく反映したいと思います。
ですがあくまでこの作品の感想でお願いします。

第三話 少女の涙

緋神雁夜は魔術師であった。

十一年前に間桐を捨て魔術も捨てるはずであった。

だが、一度裏の世界に足を踏み入れた者がそう簡単に表の世に馴染める筈も無く。

ある事件を境に、また裏の世界に足を踏み入れることとなる。

魔術の才能など普通の魔術師に比べて劣る雁夜がそれらと戦うには新たな力を得る必要があった。

それ故に多くのものを習い、多くのものと戦った。

優れた者は無かつたが死と生を彷徨つほど地獄の修練である程度までの能力を得ることが出来た。

だが、所詮は凡人である。

才能高いものには決して敵うことは無い。

それを覆すのは策略、経験、そして生への執着心。

命あればまた戦うことも出来る。そう教えられたが故に彼は撤退を恥とは思わない。

退くことを恥とは思わない、本当に恥ずかしいのはすべてを諦めて

死ぬことだと思つてゐる。

潔さなど無い、高潔な考え方などいらない、守るべき者のためならば
全てをなげうつても救い出す。

彼はすでに、魔術師ではなかつた。

蟲倉から出てきた雁夜を待つていたのは先ほど桜の保護に向かわせ
た女アサシンであった。

先ほど吹き飛ばされて蟲倉から飛び出で行つた残骸はどうやらこの
女アサシンが片付けてくれたようだ。

「マスター、お連れしました」

その腕に抱かれる形で桜がいる。

桜は何が起きたのかわかつていないので、いつも通りの虚ろな
瞳をしている。

そうさせたのは臓硯、だが今まで止められなかつたのはオレの責任。

『桜ちゃん、これを飲んでくれないか』

そうじつて懷から小さなビンを取り出す。

中には透明の液体が入っている、この田のために知り合いから受け取った品だ。

おかげで凄まじいほどの借りを作ってしまったがそれはいいだろ？

「はい」

感情の籠らぬ声で返事をして受け取る。

そしてビンのふたを空け中身を飲み干す。

すると液体の影響で体がビクッと震える。

それを見たアサシンが聞いてくる。

「マスター、あれは？」

『まあ、簡単に言えば虫下しだ』

「は？」

『それもただ虫下しじゃない、仙術を扱う知り合いから取り寄せたものだ』

仙人までとはいかないがかなりの術者で信頼できる人物からの贈り物だ。

「はあ」

アサシンは何を言つてゐるのかわからなかつた。

なぜそれをこの状況で飲ませるのか。

だがすぐに理解した、先ほど主が殺した老人のことを。

蟲使い、おそれらべーの少女の体の中にも蟲が入つていたのだ。ひりつ。
この少女からは主以上の魔力を感じる、いまだ成熟されていないが
すでに主を超えている。

そんな少女を育てればとてもよい魔術師になるだらう。

蟲はそのためのものなのだ。

”なんと、卑劣な”

暗殺者は心を殺さねばならない。心を乱してはいけない。

それでも、わかっていても怒りを覚える。

まだ年端もいかぬ子供を道具として扱うなど。

アサシンも暗殺者は道具のようなものだと思つてゐる。

だがそれは暗殺者として確立したらの話である、そうなれば血の
子供といえども道具として扱う。

しかし暗殺者として開花していない子供を道具として扱うことなど
無い。

暗殺者になるまでは情愛をもつて育てるのだ。

それを、先ほどの老人は

『それが、魔術師だ』

雁夜は呟くように呟いた。

本当に小さく声で、隣にいるアサシンにしか聞こえないような小さい声。

だがその声には多くのものが籠っていた、怒り、悲しみ、後悔、懺悔

この少女をここまでしたのは自分にも責任があると呟いていたようであった。

『家のために、根源に至るためなどとふざけたもの為に子供を道具のように扱つ』

雁夜がやつていつてゐる内に桜も楽になつたのか、机を見上げてくれる。

「お爺様の蟲が」

いなくなつた、やつ不思議そつて呟いた。

その言葉を聞いて安堵した、ざわざわめくつたらしく。

まあ、すでに自分が先ほど召喚の前に服薬しておいた。

スパイが歯に毒を仕込んでこるより、歯に薬を仕込んでおいて召喚寸前に服用する。

不審に思われればあの爺のことだ、きっと中断していただろ。

だがサー、ワントの幻象ともあり、セーモド『気が回らなかつたようだ。

『仙力をこめた駆虫薬だ、さすがの爺の蟲もひとたまりも無いだろう』

不思議そうに見上げてくる桜にかがんで頭を撫でる。

『もう間桐臘硯は死んだ、桜ちゃんの悪夢は終わつた。もう、あんな地獄はあじあわなくていいんだ』

それを言つても桜は何を言つているのかわかつていな。

あの臘硯が死んだ、そんなのがりえない。

わいつどゞいかでまたこぢらを見てるんだ。

だがこの屋敷の中から臘硯の気配は感じない。

蟲たちを通じて大体居場所はわかるのだが、先ほどからこきなり臘硯の存在が認識できなかつたのだ。

そして蟲たちの声も聞こえない。

まるであの頃のよう

「・・・なんで」

桜は自分の頬を流れるものをはじめ何なにか理解できなかつた。

だがすぐに気付いた、涙である。

涙は頬をつたい床に滴り落ちている。

最後に涙を流したいつだろうか、涙の流し方など忘れてしまつていたのに。

昔は涙を流すのは決まつて悲しいことがあつた時だつた。

でも何故か今流す涙は悲しいものではなによつた気がする。

それが何なのかは理解できない。

『泣いていい、泣いて良いんだよ』

雁夜はやさしく抱きしめる。

壊れてしまつた悲しき少女。

壊れなければ、生きていけなかつたであらつ。

それほどまでに悲しい現実を突きつけられた少女。

おれはこの娘を救わなければならぬ、この命に代えても。

それからしばらり泣き続ける桜を抱きしめて、泣きつかれて眠ってしまった桜を女アサシンに預ける。

『君は桜の護衛を頼む』

「了解いたしました」

そう言って桜を抱えて寝室に戻っていく。

それを確認すると雁夜は懐からタバコを出して火をつける。

「マスター、あの少女の元に行かなくてよろしくので

『その前に終わらせなきやいけない』ことがある』

事実上保護者である自分が着いて行かないことに疑問を持ったアサシンが尋ねる。

確かに一緒に着いて行って傍に居てやるのが一番だつ。

だがその前にやらなければならぬことがあるのだ。

『間桐の魔術を終わらせる』

第三話 少女の涙（後書き）

指摘びじびし送つてください。
冷やかしは、や～よー！

第四話 始まりの夜明け

雁夜と現界したままのアサシンは一人で屋敷の中を歩いていた。

行き場所はある部屋、この家の長男の部屋だ。

部屋の前に着くと乱暴に扉を開ける。

『入るぞ兄貴』

中に入ると酒を飲んで泥酔していた間桐鶴野がいた。

乱暴に開けたのでこちらに気付いたのか酔っている状態でこちらを向く。

「雁夜、何のようだ

鶴野は桜の魔術の教育を行つていた。

だがその罪悪感と無力感から酒に逃げていた。

『間桐臓硯は死んだ、故に間桐の魔術刻印は完全に破壊された』

「か、雁夜。何を言つて」

状況が飲み込めていない鶴野に構わず傍まで近づく。

掌に魔力を込め自分の武器を顕現させる。

眩い光とともに一本の日本刀が雁夜の右手に収まる。

『この武器は師から錢別に貰つた代物だ、はつきりと書いて身に余るほど

の名刀である。

それを鶴野の首元に持つていく。

「ひいっ！」

怯えた鶴野に雁夜が冷めた瞳でさらにならべく感情の籠りぬ声で言う。

『魔術を捨て唯の人として生きろ、財産は多くあるだりつ。それを使って息子を連れてどこか遠くで暮らすんだな』

「わ、わかった

雁夜の有無を言わざぬ言葉に鶴野はただただ頷くしかなかった。

『今日中に荷物をまとめて出て行け。いいな』

すでに酔いも覚めたのであるが、鶴野は壊れた人形のように首をがくがくと揺りしながりつなづく。

「あ、ああ」

『用はそれだけだ。わたくしとの家から出て行け』

刀を戻して踵を返し部屋を出るために歩き出す。

後ろで兄が荷物をまとめる音が聞こえたが、氣にも留めずに桜の元に向かう。

部屋に着いた雁夜に女アサシンが立ち上がり一礼する。

『桜はどうしてる』

「先ほど疲れからか、すっかり眠っています」

『さうか、よかつた』

兄に向けたときの言葉とは違いとても優しい声で言つ。

それほどまでにオレは安堵しているのだ。

だが問題はこれで終わりではない。臓硯を殺し、兄の鶴野もこの家から出すことにした。

でも、まだ桜の心は癒えていない。

壊された心は簡単には戻らない、長い時間と一緒にいてやれる人間が必要なのだ。

それは途方もなく時間がかかるだらう、だが

『辛くなんか無い、この娘はもっと辛いことを味わったんだ。大人

のオレが守らなきゃ いけないんだ』

絶対に、守り抜く。

桜と再開したあの日誓ったこと。

この地に戻ってきたのは、いまだ間桐に心残りがあったのを師から見抜かれ、最後のけじめをつけるために帰ってきたのだ。

だが今は大切な者を、桜を救うことが戦う理由の一つになっている。

『アサシン、これから聖杯戦争が終わるまで桜の護衛を頼む』

「！」の命に代えても

女アサシンはそう応える。

これから聖杯戦争が始まる、おそらく自分も唯ではすまないだろ？
この屋敷も襲われるかもしね、結界などもあるがサー・ヴァント
が相手では限界がある。

だがアサシンならば桜を守つて逃げ切れるだろ？

「 めじ・・さん」

桜の声がして思考をやめ声の方を見る。

すると虚ろだがしっかりと目を開けた桜がこちらを見ている。

桜は人の気配に敏感だ、おそらくそれも魔術の訓練のせいだらう。

『桜ちゃん、まだ眠つても良いんだよ』

「おじい様は本当に死んじゃつたの」

『ああ、確實にね』

オレは断言した。

それはアサシンもそう言つていたからだ。

「なら、私はこれからどうすればいいんだろう」

『え?』

「だつて今までお爺様の言つとおりにしてきたから

その言葉を聞いて愕然とした。

この娘は、桜はこれまで臓硯の言つ通りにしてきた。

それが当たり前だったのだ。

故に、臓硯が死んだ今、桜に命令する人物はない。

この自由すら忘れてしまつた少女はどのような心理状況なのだろうか。

『オレのせいだ』

雁夜はそう呟いた。

なぜもつと早く助けられなかつたのだろうか、この家に帰ってきた時点で隙をつけば臓硯を殺せるだけの力はあつたはずだ。

でもオレはそれをしなかつた、理由は簡単である・・・・・怖かつたのだ。

人を捨てた父が、あの頃の弱い自分を見下した父が、力を信じられない自分に。

ただムカつくという理由で。

所詮オレは、

「泣いてるの、おじさん」

桜のその言葉を聞いて自分が涙を流しててること。

「つらいの?」

自分を救つたことが、そつ言つている様であった。

だがこれだけは言える。

『違つよ、桜ちやん。おじさんね、これからのことを考えていたんだよ』

「これから？」

『これから先のこと』

聖杯戦争に生き残る、当面の問題はそれ。

臓硯を殺しても自分が死んでは意味が無い。

桜を救うために自分も死ねないのだ。

『なあ桜ちゃん』

「なに？」

『これから、おじさんの仕事が終わつたら、旅行しないかい』

「旅行？」

『ああそりだ。おじさんの友達や色々に人に会つんだ。そして』

思い浮かぶのは世界最強の風使い、そして彼の父親と弟。従姉妹に
あたる炎を司る少女。

外国にいる自分の師、色々なことを助けてくれた仲間たち。

『いろんな場所に行くんだ』

自分の生き方を変えた場所、自分の世界が変わった場所。

そこに桜を連れて行きたい。

『どうする桜ちやん』

「行きたいです」

『じゃあ、約束だね』

雁夜は小指を出す。

これをするのは何十年ぶりだろうか幼い頃に幼馴染とした以来だろ
う。

桜も同じように小指を出す。それを繋ぎ、

『ゆ～び～を～りげ～ん～ま～ん、う～そつ～い～たら、は～り
～せ～んほ～ん～の～ま～す、ゆ～びきつた』

桜が寝たのを確認してから女アサシンだけを残してアサシンとともに部屋を後にする。

二人は無言で雁夜の部屋まで歩いていく。

その時、雁夜がアサシンにいう。

『アサシン』

「何でしょうか？」

『勝つぞ、この戦いに』

「御意」

すでに夜が明け空が白くなっていた。

第四話 始まりの夜明け（後書き）

四話目いかがでしたか。

第五話 戦準備

寝室を後にした雁夜はアサシンと一人で部屋にいた。

『改めて自己紹介からしどくか』

よく気付けば自分は名乗ったが相手から名乗つてもうつていないと気付いた。

いきなり臓硯を襲わせた自分の責任であるが。

『オレは緋神雁夜、元は間桐の魔術師で十一年前にこの間桐^{いえ}を出奔、その後外国に渡つて精靈術者になつた』

「精靈術者と言えば、精靈を司りそれを操る者で」

『オレはそんなに大層なものじやない、凡人の域を出ない二流だからな』

事実雁夜の実力は他の精靈術師と比べたとき大きく劣る。

だがそれでも戦い抜いてきたからには理由がある。

『ここに来るまでは友人の風術者と一緒にある屋敷で仕事をしていた』

友人と言つより戦友に近い存在である。

ただし実力は完全に友人のほうが上だ。

雁夜がどうあがいても勝てない相手である。

台風クラスの風を扱う術者にどう勝てと。

『一応風術と炎術の使い手だ。ただし本職に比べると威力は低いがな』

元々、炎と風の精靈魔術は相対するがゆえにともに精靈と契約することは不可能である。

ただしそれは通常の精靈術師であればこそ、雁夜は捨てたとはいえ魔術師の家柄に生まれた魔術師だ。

いわゆる例外という方法を使用しているのだ、ただしそれを使つたとしても術の威力は格段に落ちる上に術の習得、使いこなすことが困難になる。

神凪などの正統な術者と違つて雁夜はもともと持つ才能が無い、故にどうやっても威力では勝てないのだ。

それゆえに雁夜は気が遠くなるほど修行をこなしてきた。それでもまだ、一流の術者には遠く及ばない。

「マスターの能力は把握しました。次は我らが

雁夜の能力を聞いたアサシンは白いの」とを語る。

「私はアサシンのサーヴァント、真名はハサン・ザッバーハ。ハサンとお呼び下さい」

そう言って一礼する、これについてはすでに過去の聖杯戦争で知りえた情報だ。

セリヒ先ほどの念話で反故についても確認している。

その上クラススキルの気配遮断もA+と高い。

血口紹介もそこそこに本題に入る。

『まずは今後の方針を説明する』

「はっ」

「まだ方針も決めずに臓硯殺害と鶴野の追放をしていたので何も決めずに一日が終わろうとしていることに気付いた。

桜も眠ったので今から決めて行動するつもりである。

『アサシンという特性上、真正面からぶつかるのは分が悪いな』

「仰る通りでござります、我らアサシンは純粹な戦闘力では他のサーヴァントに比べると劣ります。しかし、その反面」

『気配遮断スキルを使った諜報、追跡、そして暗殺に長けている』

「御意にござります。承知していると思いますが我らの宝具は妄想^{ザバー}幻覚でござります」

妄想幻像、現界の際に精神を複数に分担し、複数人で行動できると言つもの。

アサシンの気配遮断スキルと相まって諜報には最高の宝具である。

ただし欠点もある、ハサンはあくまで総体で一人のサーヴァントなのである。

量の増加は質の低下を招くと言葉通りに分裂すればするほどハサンの能力は低下していく。

元々のステータスも大して高くないハサンにとってその状態で他のサーヴァントとの戦闘は望まれるものではない。

『当面は各サーヴァントとマスターの動向を調べ、能力を調べるか』

「それが妥当でございましょうマスター」

『隙をつけば敵のマスターを討つことはハサンの能力ならば容易いが』

「サーヴァントに阻まれればいたせか難しいでしょう

敵の拠点を見つけても魔術師の持つ工房で結界やトラップのある上にサーヴァントの防衛だ。

如何に気配遮断スキルA+を持つハサンでもそこでマスターを討つのは容易ではない。

『へへへへへへへ』

「どういたしました、マスター」

急に笑い出した雁夜にアサシンが尋ねる。

『なに、じついつた非現実的なことを大真面目に話していることが可笑しくてな。魔術師ならば慣れているんだろ？が、それを捨てたオレからすれば可笑しくてな』

「無理もございません、本来魔術師でないものが聖杯戦争に参加することは異例ですからな」

『だがこれからはそもそも言つていられない。聖杯を勝ち取るべく闘わなければならぬからな』

魔術師たちの闘争、そうなれば奴も出てくるはずだ。

この地のセカンドオーナー、遠坂家の当主も。

いまさら過去の因縁を持ち込むつもりは無いが強力な敵だろ？。

プライドの高い奴だが実力は確かだ。

出来れば他の奴が潰してくれればいいんだが奴の実力と名門の遠坂の魔術師が呼ぶほどのサーヴァントを相手にしては他のサーヴァントでも苦戦するだろ？。

『厄介な相手だ』

「誰がですか」

『遠坂時臣、冬木のセカンドオーナーで魔術の名門遠坂の現当主だ。魔術師としての実力は言つ事無し、さらに遠坂邸は冬木で第一位の靈脈だ。あいつ程の魔術師が呼ぶ英靈となれば超一品級のはずだ、いささか分が悪いな』

「その遠坂当主とは知り合いで」

『まあ、昔ちょっとな』

同じ冬木の魔術師だ、顔ぐらい合わせたことはある。

何より厄介なのが奴の才能。遠坂時臣と言つ男は平凡な才能しか持たぬ魔術師であつた。

しかし過酷な試練を課しそれを乗り越えることで一流の魔術師になつた男だ。

もしあいつが天才だつたならば、慢心や驕りという隙をつけたかも知れないがああいう努力のタイプはそういうものが少ない。

それ有何となくむかつく奴だ。

『最も魔術師らしい魔術師だな』

その言葉こそが遠坂時臣を形容するにふさわしい言葉。

根源に到るために魔術を極め続ける、それは理解できる。だがそれは、家族を捨ててでも成さなければならぬのか？

桜ちゃんと凜ちゃんが争わないようにする為といつ事はわかる。家督を継ぐといつことはそれほどまでに大事なことなのだと。

だが奴も知っていたはずだ。奴の、間桐臘覗の異様さを。それを知つていて尚、奴は桜ちゃんを養子に出した。

オレはそれが憎い、あの娘を結果的に苦しめた奴が、それをとめる事の出来なかつた自分が、だから。

これはオレの仕事なのだ。時臣に問いただす。桜が大切なのかを、魔術師であることを理解したつえで愛せるのかを。

「してマスター、あなたが聖杯に何を望みますかな」

『・・・・・・・ そついえば聖杯はなんでも望みを叶える願望器だつたな』

「・・・・・・・

雁夜の部屋になんとも言えない空気が流れる。

「・・・・・・マスター、まさか忘れていらっしゃったのですか」

さすがにこれにはハサンも唖然としている。おそらく桜の寝室にいる女アサシンも同様だろう。

それ以前に全マスターが聞いても同様の反応をするだつ。

本人に関しては、

『いや～、桜を救う事と臓硯を殺すことに考えがいつてたからな～。
あつはつはつ～』

などと呟つてゐる始末である。

己の過去に踏ん切りをつけるために戦いに参加したのだ。元々願い
なんてものは存在していない。さらに桜の件がありいつそ忙しく
なつたのですつかり頭の中から消えていた。

もしかしたらビージャやの征服王並みに天然な発言かもしれない。

『それにオレには願つものは無いぞ』

「は？」

アサシンは雁夜の言葉に耳を疑つた。

魔術師ならば根源への到達、魔術師でなくとも何か願つものがある
はずだ。

それなのに自分のマスターは無いと言つて切つたのだ。

『オレには世界を救うなんていう崇高な考えもなければ、世界を我
が物にするなんて野望もない、無論根源に至るなんとのもどうでも
いい話だ』

「ならば、この聖杯戦争を闘つ理由は」

『そんなの決まっている桜のためだ。まあ、始めは違つたんだがな』

「始めは違うと」

『そりだ、元々この家に、魔術師としてのオレにけじめをつけるつもりで闘いに参加したからな』

だが、今は断言できる。

『今は桜ちゃんを養子に出した時臣に間桐の、臓硯が行つた事の恐ろしさを伝え、それでも尚桜を愛せるかを問う』

身体中を蟲に犯された娘を、それでも愛せるか。

マスターは何を言つている。命を欠けて闘う理由が娘を愛せるかを問うためだけだと。

『オレの願いは唯一つ、桜ちゃんが笑顔を取り戻すこと。さじすめ聖杯戦争はそのための手段つて奴だな』

桜の幸せのためならば命を懸けても良い

何故だらうか、その言葉に自然と笑みがこぼれる。

どこの世界に田の前に何でもかなう願望器があるのにそれに田もくれば、ただ一人の少女の笑顔を取り戻すためだけに命をかける人間がいようか。

私もかつてはこのような思いを抱いていたのだろうか、今となつては思い出せないが。暗殺者となる覚悟を決めた時に何を誓っていたのだろうか。

ついでに今日は面白いマスターに会つたよつだ。

「……なれば、おまえが持つマスター

「このハサン、生前は暗殺者とし生きてきました。その生涯に後悔などありません、故に聖杯に願うものなどありません」

膝を折り、頭を垂れ、忠誠を尽くす構えを取る。

「主が聖杯ではなく、その先にあるものを望むとあらば。我ら全ての命を散らしても、あなたに勝利を約束しましょう」

今ここに一つの主従が誕生した。

魔術師を捨てた非才の精靈術師と闇に生きる暗殺者が動き出す。

ただ一人の少女の笑顔を取り戻すために。

その先にあるのは死という絶望か、それとも・・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8680x/>

Fate/Zero 閻を駆ける者

2011年11月17日18時04分発行